

はじめに

## 名を知らずとも

－「平成16年度看護研究交流センター年報」発行にあたって－

看護研究交流センターの活動は3年目が終了しました。

年度の途中に中越地域は未曾有の大型地震（新潟県中越大震災）に襲われ、多くの教員が学生とともに可能な限りの力を振り絞り、教務・学業の合間を縫ってボランティア活動に従事してまいりました。

この経験から貴重なものを得てきた、と思います。研究機関というものは、確かに不易の科学的真実に迫る実証的研究を目的とするものではありませんが、被災者の方を対象とした待ったなしケアの実践は、決して価値の低いものではない、これこそ正に「実学」です。初対面ですが手と手を取り合って語り合った避難所のおばさんの顔が今も忘れられない、と学生達と言います。「名を知らずとも、心と心とが合えば、これすなわち友である」\* ボランティアに行って被災者が元気になったのではなく、勇気づけられ、元気を取り戻し、学習したのは私達のほうでした。

私は、この経験から実践に根ざした多くの研究がスタートするのではないかと（いや現に身近に見聞きしている範囲でも始まっていますね）と考えます。これは無言の内に我々の看護研究交流センターが進むべき一つの方角を示しているように思います。

平成16年度は、本来この看護研究交流センターの中核事業である地域還元について、より一層姿勢を鮮明にするべく、幾つかの改革に着手致しました。

地域課題研究テーマを一新し、地域課題研究第3研究班の研究テーマを「ヘルスケア分野の専門職のためのメタデータウェアハウスの構築」と名称変更したことは、昨年報告済みですが、ネットワーク部会の一定の成果を踏まえ、これを次年度（平成17年度）の組織変更と連結して、外部の研究機関や研究者との共同研究がスムーズになるよう、鋭意「衣替え」を企画中です。その詳細は、次ページの「看護研究交流センターの新たな事業展開のための組織改革について」をご覧ください。

学際的研究として第4研究班は「豪雪地帯における高齢者の居宅での保健医療福祉サービスの効果的提供」とのテーマで、新潟大学と共同研究課題で取り組んで参りまして、この年報の中の報告で一段落を迎えます。むろんこれで完了というわけではなく、単なる節目であり、今後も研究機関が連携しておこなう地域貢献型の研究活動のモデルとして、これからも継続できる姿を模索しております。

これまでの本県の関係各方面のご支援ご尽力に、心より感謝申し上げます。

平成17年6月20日

新潟県立看護大学看護研究交流センター  
センター長 吉山直樹

\* :『思い出の遠友夜学校』より新渡戸稲造の言葉